

ペシヤワール会報

No.27



ベシヤワール会 〒810
 一丁目一〇一二五 福岡市中央区大名
 電話・FAX 〇九二(七三二)二三七二
 上村第二ビル三〇七号

- JAMS は健在です シャワリ・ワリザリフ
- ある葬送 屈折した気持を抱いて 中村 哲
- 海千山千の人間にもまれて 石松義弘
- 患者さんの悩みに胸が痛みます 吉武英子
- 指のない手に愛しさを感じます 藤田千代子
- [神と泥と人と言 葉] 甲斐大策

街頭を行くベッド*表紙画 甲斐大策

ベシヤワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

JAMSは健在です

湾岸以降も今まで通りの活動を続けています

JAMS(ジャパン・アフガン・医療サービス)院長

シヤワリ・ワリザリフ

湾岸戦争以来、ペシャワールから撤退する外国援助団体が続く中、小さいながら着実に活動を展開しているJAMS(ジャパン・アフガン医療サービス)のシヤワリ先生より頼もしいお便りを頂きました。

親愛なる中村先生

お元気ですか。日本の皆様、あなたのご家族、お母様、ご兄弟姉妹達……(略)、ペシャワール会の皆様はお元気でしょうか。こちらは皆元気でやっています。石松先生もリハビリより戻られ、吉武先生、藤田看護婦、JAMS、ミッシオン病院のスタッフも皆元気でです。

湾岸戦争の影響はペシャワールにも影を落とし、最近では町で見かける外国人援助団体ワーカーたちの数もめっきり少なくなりました。イスラマバードに移った者、本国へ帰った者、様々なようです。でも、JAMSは健在です。今も金曜日を除く毎日、

診療所を開き、以前通りの活動を続けています。

スタッフの皆各々に、ライに関する講義や臨床検査、英語のクラスに数学、ペルシヤ語と、自分の勉強に精を出しているといったところですよ。さらに石松先生が戻られてからは、熱帯医学講座、レントゲンの勉強と、毎日ルーティンが終わる二時から始めています。

アフガン暫定政権はそのほとんどの事務所を閉鎖し、人々の生活は悪くなるばかりです。おそらく、ペシャワールでの飢餓の度合が深まれば、それに合わせてアフガニスタンに帰る人々の数も増えていくでしょう。

う。

最近では、JAMSにやって来る患者の数も増えました。少しずつ母子健康のプログラムも始めています。五歳以下の子供たちを集め、その子らの母親に衛生のこと、栄養のことなどを教えています。

今年の末ぐらいまでには、アフガニスタン内部に小さな診療所を開きたいと思いい、ペシャワールに程近いクナルへ、親戚のいるスタッフを送って状況を見て来させました。土地もあり、交通機関も整備されているようなので、チームを組み、交代でス



JAMSの病院前で。(左から5番目がDrシヤワリ)



JAMSで工作中的の検査室スタッフ

タッフと薬を送ることが出来ると思います。ペシャワール郊外のテメルガールの診療所では、ライ患者の接触調査を始めていますが、ここで経験を積んで、いずれはアフガニスタン内部で診療が行える日を心待ちにしています。

今私は、たとえ規模は小さくても、私達の能力が十分に役立つときが来た、と感じています。どんなに小さくとも、最大限その能力、もてる装備を生かせば、沢山のことがやれるのです。やろうと思えばやれる



診察中のシャワリ先生

のに、何故手をこまねいてじっとしている必要があるでしょう。平和も自由も（持ってなかった私たちは）、希望さえももってはいけないのでしょうか。

下手な英語ですみません。こんな間違いだらけの文章を最後まで読んでくださって百回の「ありがとう」を伝えたいと思います。ペシャワールへのお帰りを首を長くしてお待ちしています。

ペシャワールにて
1991年2月5日

〔JAMS診療報告〕

*今号より、以前から事務局に送付されていた、JAMSの「月間診療報告」を数ヶ月分ずつ掲載してきたいと思います。
(1991年1月1日～2月28日)

◎フィールドワーク

訪問難民キャンプ 4ヶ所
診療数 726名

◎検査

血液検査 691件
化学反応検査 275ヶ
らい細胞検査 52ヶ
尿検査 564ヶ
便検査 687ヶ
モントークス検査 18ヶ
心電図 41ヶ
X線 207ヶ

◎ペシャワール診療所

外来患者数 のべ 3,172名
入院患者数 27ヶ
退院患者数 48ヶ
月末在院患者数 21名

◎テメルガール診療所

外来患者数 のべ 1,258名
マラリア検査陽性 163件
血液検査 255ヶ
尿検査 407ヶ
便検査 408ヶ
ライ細胞検査 74ヶ

ある葬送

屈折した気持を抱いて

ペシャワール・ミッション病院医師
JAMS(ジャパン・アフガン・医療サービス)顧問医師

中村 哲

*ムツラーの訴え

茶褐色の荒涼たるアフガニスタンの山々を背景に、まるで埃っぽい土中から湧きだしたような荒れ果てた村落の残骸の中で、ささやかな葬儀がとり行われていた。

遺体は手作りの柩に収められ、土中深く埋められた。質素な葬式にはカラシニコフ銃で武装した数百名の住民が参列し、慣習に則ってムツラー(イスラム僧)がコーランの句を唱えて祈りを捧げた。そう遠くない所で時折砲声のこだまする中、やつれた面持ちのムツラーは、列席の住民たちに訴えた。

「彼は今、神の御元に帰る。この十数年、彼は難民として幸せではなかったろう。彼

は死んで初めて永遠の平和を得た。我々もそうである。我々はジハード(聖戦)を継続するだろう。かつてアングレーズ(英

国)に対して歴史的闘争を行ったように、我々はあらゆる侵略者と戦うだろう。イスラムを守り抜け。だが、注意せよ。イスラムの同胞をイスラムの名で圧迫するのはイスラム教徒ではない。」

列席した住民たちの間に深いうなずきとどよめきが生じた。

なぜなのでしょう。——現地ではサウジアラビアの団体が勢力を持ち、さらにソ連軍と前線を構える抵抗組織がミニ軍政を敷いており、住民は砲火と干渉の中で辛うじて自治を守ろうとしていた。彼ら住民自身も武装していたが、十二年にわたる内戦に疲れ

きっており、大多数は難民としてパキスタン側に移っていた。しかし今、心論から米国に与するサウジアラビアを非難すれば、財政的に日干しにされるだろう。他方、過激なイスラム主義の抵抗組織は、「イスラム」の名において共産主義政権以上の暴虐を奮う——およそこのような状況下での苦しい呼びかけだったのである。

*影をひそめた欧米系NGO

二月下旬、私はJAMS(日本—アフガン医療サービス)のアフガン人スタッフの葬儀に加わるため、パキスタン・北西辺境州の自治区からさらにアフガニスタンのクナルの奥地に入っていた。もう一つの目的は、年来の目標であったアフガニスタン内部クリニック開設の状況調査であった。

鳴りもの入りの「アフガニスタン復興・難民帰還」の各国プロジェクトは、我々ペシャワール会JAMSと一部のアラブ系団体を除けば、影をひそめていた。あれほど騒がれ、押し寄せた欧米NGO(民間援助団体)の復興援助ラッシュの狂宴が嘘のようである。ソ連軍撤退後二年経つ今も、



難民生活はこれからも続く

内乱さえ終結していない。葬儀の行われている場所から二・五キロメートル先にはアフガン政府軍の陣地があり、いぜんとして激しい戦闘が続いていた。灯火管制の下、我々は夜間月明かりを頼りに山沿いの悪路を迂回せねばならなかった。

「難民帰還」どころではない。田畑は荒れ果てて砂漠のようであり、破壊された村落の残骸は、まるで廢墟と化した遺跡である。ただ遺跡と異なるのは、時折人間の死体がころがっていることであつた。莫大な

費用をつぎ込んだ難民帰還プロジェクトは、少なくともここでは複雑な対立と民心の荒廃以外に何物ももたらしていなかった。地元住民、抵抗組織、アフガニスタン政府軍の三つ巴の抗争に加え、湾岸戦争の影響はアフガン人内部に複雑な対立を更に増幅させていた。

* 荒れ果てた故郷

ペシャワールから險路を十二時間もかけて遺体を運び、故人の故郷で葬儀が行われたのは訳がある。先祖伝来営々と営まれてきた田園の生活は、戦で追われて難民となった住民たちの心深く、望郷の念を刻みこんでいたからである。また、余りに多い犠牲にもかかわらず、ここでは人の死の意味が日本などよりも遙かに人々に重くかみしめられていた。

十年ぶりの荒れたわが家を前に、呆然と立ちすくむ者もあつた。葬儀の行われた家の井戸の中には、白骨化したソ連兵の死体が放置されていた。深さ五メートルほどの井戸の底を覗くと、白骨死体と対照的に、地下水の清澄な青さが不気味なほど美しく

つた。

人々は無感動にそれを眺め、生まれ育つた村の懐かしい木々、小川の流れ、モスク、井戸、駆け登った山々の一つ一つを、少年時代の思い出と共に、とりとめもなく語った。しかし、たとえそれが如何に心地よい感傷を呼び起こしても、砲声がすぐに彼らを現実に取り戻すのであつた。

* 「米・英の走狗」日本

私はといえば、内心別の立場からこれら純朴なイスラム住民の反応を恐れていた。湾岸戦争に日本が九〇億ドルという巨額の支援を決定したことが、大々的に報じられていたからである。希望と尊敬の的であつた日本が、実は「宿敵・米英の走狗」という裏切られた印象を拭い切れなくなつていた。事実、サウジアラビアと直接の利害関係のないイスラム民衆は公然と「フセイン万歳」を叫び、ペシャワールの街角では至るところに肖像画が貼られていた。湾岸戦争勃発以来、激しい反米デモが連日荒れていた。欧米人の姿は忽然と消え、一部は帰国し、残留した者も一時的なパニック状態

に陥っていた。欧米諸団体の「難民援助プロジェクト」はとどめをさされ、UNHCR（国連難民高等弁務官）の事務所さえ爆破される事態になっていた。

しかし、ペシャワールよりもさらに隔絶されたパシュトゥン部族（アフガン人）のイスラム伝統社会のただ中で、元来ならばカーフィル（異教徒）として異物扱いされる場所で、共にムッラーの説教に耳を傾けている自分が奇妙な立場にいると思った。日章旗を描いたJAMSのジープが遺体を輸送し、私は友人として扱われていた。

*ジャパン・ジンダバード！

「JAPAN」の名は、日露・太平洋戦争と共にヒロシマ・ナガサキで広く奥地まで知られている。だが、「日本はイスラムをどう見ているか」というありふれた問いも、今の私には余りに残酷であった。

「我々はアッラー（神）の欲する平和を愛する。内戦で諸君は何を得たか。平和こそが日本の国家理念だ」という言葉は常に現地で説得力をもっていたものである。そして、言葉は私を離れて、地獄を体験した者

には真実の共感を生んだ。

しかしこの時、「ジャパン・ジンダバード（日本万歳！）あなたは兄弟だ」というある長老の言葉が、お世辞なのか好意なのか分からぬほど、私は屈折した気持ちを抱いていた。恐らくその両者が正しかったのであるが、それは我々JAMSのチームが地域のパシュトゥン住民の信頼を勝ち得てきた成果で、この状況下では奇跡的にも言えた。

久しぶりに戻った住民たちは、この離れがたい故郷の廃墟に、なおも希望をつないでいた。しかし、かつてこの土地を守るためにゲリラとして果敢に戦い、勇猛で知られたJAMSの仲間が、ぼつりと消えた。

「ムジャヘディン（イスラムの聖戦士）なんか、もういやしない。いい奴は皆逝っちゃまった。金で頭のいかれた奴らとオルース（ロシア人）が戦争ごっこをしてるのさ。だが、いつまで……………」

*ただの幻のような

昨夜うつすらと降り積もった雪が、どこまでも澄み切った紺碧の空を背景に、山々

の稜線に美しい純白の縁取りを与えていた。それは、カラコルムの氷雪から解け出るクナール河の悠然たる水の流れと共に、静かに何ものかの意志と和やかさを届けているように見えた。そして荒寥たる人里の光景も意に介さぬように、すべてをその中に抱擁するようだった。

我々はまた戻ってくることを誓って、車にエンジンをかけた。舞い上がる砂塵が時折、故郷を再び後にする人々の姿を隠した。風化して消えゆく人の営みの確かな実感の中で、日本が何か蜃気楼の如く、ただの幻のような気がした。あつたにしても、それはこの光景からは余りに遠い世界であった。



一九四六年福岡市に生まれる。一九七三年九州大学医学部卒業。一九八四年パキスタンのペシャワール・ミッション・ホスピタルに赴任。らいを中心にしたアフガン難民の診療に携わりと共にJAMS（ジャパン・アフガン・医療サービス）を設立、長期的展望に立ったアフガニスタンでの医療活動をめざして現在に至る。著書に『ペシャワールにて』（石風社）『ペシャワールからの報告』（河合文化研究所）がある。

●ペシャワール便り

信頼厚く和気あいあいと

中村 哲

みんな元気です

お元気でしょうか。ここペシャワールは寒さも峠を越え、街路では、うすももいろのアーモンドや杏の木が小さな桜のような花を咲かせ始めました。郊外は一面の菜の花の鮮やかな黄色が、麦の緑と共に、茶褐色の山肌を背景に、不思議な美しさを漂わせています。

小生は去る二月二十日にペシャワールに戻ってきて、性懲りもなく仕事を続けております。今回は、藤田さん、吉武先生、石松先生に加え、ペシャワール会から事務のピンチヒッターである西岡さんがいて、いつもより随分楽をさせてもらっております。

戻りますと、吉武・藤田両ワーカーの力量は大したもので、大方の手術はもちろん、ウルドゥ語も短期間によく習得し患者たちの信頼も厚く、スタッフたちとも和気あいあいとやっておられました。

この困難な事情にしてよくここまで出来たものと、感謝しております。石松先生

も、十二月にリヴァプールの熱帯医学学校を無事卒業して戻られ、JAMSのセンターで活躍しております。

心配されたような地震や湾岸戦争の影響は、ペシャワール・ミッション病院のらい病棟に関する限りほとんどなく、かえってお二人の存在は次第に重きをなしているようです。

顕微鏡は大使館の方々の協力を得て、無事二台運びました。残りは空輸される予定で、待っているところです。

待たれる新病棟

らい病棟の新建築は断食月明けの五月か六月頃に完成、今秋から七十床の堂々たるものになります。さらに九月からは、ペシャワール会を通して、天草出身の松本看護婦が二年の長期ベスで加わることになっており、さらに充実したものになることでしょう。

北西辺境州政府のフィールドワーク・オフィスもペシャワール・ミッション病院のらい病棟に正式に移管され、合同で

週一回のフィールドワークを実施すると

共に、ペシャワール地区のらい診療員を集め、共に学習会も開かれるようになりました。らい病棟は事実上の半公共施設となり、これでペシャワール会の補給と良い医療サービスの続く限り、何があっても（たとえ病院の管理や政情の激変があっても）揺らぐことはないでしょう。

この背後には、JAMS（日本ーアフガン医療サービス）の陰の支えがあります。らい病棟のフィールドワークのお膳立てや、診療に必要な検査をJAMSが一手に引き受けています。特に菌検査では、以前一年以上も待たねばならなかったのが、現在では二日以内に結果を得ることができるといふ、夢のような話です。

JAMSは活動を続けます

一方JAMSも、シャワリ先生の献身的な活動のお陰で、日本で心配したほどには影響はありませんでした。昨年十二月一日に北西辺境州北部国境にあるテメルガルに支部診療所を開設、現在医師一名と検査技師一名が交代で常駐、北部山間部の八カ所の政府らい投薬所を支援すると共に、アフガニスタン内部の状況を知る基地となっています。

今秋十一月までにアフガニスタン内部に診療所を開設予定で、ここを基地として徐々に北部山岳地帯の無医地区に進出

してゆきます。

ペシャワールのJAMS本部では、アフガン人医師五名となり、石松先生の必死の努力で検査室はさらに充実しました。三月に入ってUNHCR（国連難民高等弁務官）事務所も爆破され、欧米NGOはもちろん、国連職員たちも、一部を残して全て引き上げの見通しのような愚かなことです。北西辺境州三百万人の難民たちは相変わらずきづきづきで、複雑な対立と札束による民心の荒廃を残したまま、難民帰還プロジェクトは終息に向かっていきます。

この中で、ペシャワール会JAMSの活動は殆ど変更がないどころか、徐々に活発になっていくのが奇跡的な気がいたします。いや、今までの働き方を考えると当然の帰結と言えるのかも知れません。私もアフガニスタン内部まで自由に行けるのが不思議です。これもひとえにJAMSのアフガン人・チームの献身的な活動の賜物です。

国境を越え、あらゆる政治的・宗教的意図を超え、平和の旗をおし掲げて現地の立場に立つ限り、我々ペシャワール会JAMSの働きは戦乱や迫害に疲れた人々の心に、しみじみとした暖かいものを与え続けることでしょう。先は長いですが、今後とも力を合わせて、一步一步共に進んで行きましょう。

海千山千の人間にもまれて

JAMS (ジャパン・アフガン・メディカル・サービス) 医師
大分天心堂へつぎ病院医師

石松義弘

白熱するディスカッション

拝啓

日本は少しは暖かくなってきましたか。ペシャワールは一雨ごとに暖かく、そして日差しが強くなりつつあり、一年でこの時期だけは、緑がきれいな季節となっています。皆様、お元気ででしょうか。

私は、リバプールからこちらに戻って、以前と同じように仕事に戻り、現在はJAMSの新しく増えたアフガン人のドクター達と一緒にやっております。ドクター・シヤワリ以下、若い四人のドクターがおり、みんな張り切って一生懸命やっております。私がリバプールで学んできたことを少しでもたくさん吸収しようと、彼らも真剣です。こちらでも気が抜けません。JAMSに対する一般の人々の評価は高く、ペシャ

ワール周辺の難民キャンプはもちろんのこと、遠くはカーブルやアフガンの山奥から患者さんが来るばかりではなく、最近は、他の医療機関からの紹介患者さんが増えました。それで、診断のつきにくい患者さんもたくさん来ますので、そんなときのディスカッションは、なかなか白熱します。もちろん、日本のように充分過ぎるほどの検査や治療設備が整っているわけではありませんが、

それでも現地の実情にあった検査や医療というものがあつた、そのことをきちんと言われ、本当に役に立つし、患者さんの信頼も得られる。むしろそんな現地の実情にあつた検査や医療でなければ、本当に役にも立たないし、現地に根付くこともないということが実感としてよくわかる今日この頃です。



リバプール熱帯医学校の修了式
熱帯医学研修のため世界中から集まっている

常に実践的であれ

リバプールでいろんなことを学んだうちでも、この現地の実情にあつた検査と医療ということについては特に感心させられました。私が行ったリバプール熱帯医学校は、一八九八年の創立で、ロンドン熱帯医学校と並び世界でも最も古い熱帯医学校であり、その歴史はまさに人類の熱帯病との闘いそのものであり、今なおその研究、治療、教



再びベシャワールに戻って
診療にあたる石松医師

育の最前線にあるところです。しかし何よりも感心したのは、その輝かしい歴史や成果のすばらしさだけではなく、そのすべての根底にしっかりと根付いている。常に実践的であるべきであるという考え方でした。もちろんいろんな難しいこともやっているが、さてそれを現場、つまりたいして設備もない、ややもすれば電気さえないような所で、一体どうすればいいのかということとを、常に考えつつやっていることでした。教官のすべては皆十年二十年とアフリカや、それこそ世界中の熱帯で苦勞してやってきたベテランばかりで、机上のアイデアだけでは現場に行ったとき何も出来ないことがよくわかっている人達であり、「プラクテ

イカル(実践的)」であること、本当に実行できるのか役に立つのかを常に重視していることは、その講義や実習からもよくわかりました。ベシャワールでいろいろ苦勞して、複雑でお金のかかる検査や治療が出来ないような場合や、こんな時どうしたらいいのか本にもっていないので聞きたいと思っていたようなことを、彼らはよく知っていました。特に、現在はリバプール熱帯医学校の熱帯医学グループのリーダーでもあり、熱帯医学の教科書としてはもつとも權威ある『マンソズ・トロピカル・ディーズ』という本の編者でもあるドクター・デオ・ベルには、その実践的な博識と人間性に魅了されてしまいました。彼の陰で、現場の実情にあった検査と医療ということの重要性と有効性に自信がもてました。

イギリスと第三世界

そしてここには、そんな人達が本当に普通の顔してゴロゴロいるのです。イギリスは、植民地政策を通して世界中でいろいろ悪いことをやったし、現在でもその後遺症は、第三世界にとって本当に深刻な問題でありつづけていますが、また一方では開発援助や医療協力や熱帯医学に関しての奥の深さ、層の厚さの日本との違いをまざまざと感ぜずにはおれません。ベシャワールにたかが二年くらい行っただけで人に褒められていくようなわけではないのです。「ご町内にも二、三人第三世界で働いたことがある人がいるから、あんたもどうですか：」というくらいには、日本もなつて欲しいものですが……

私が参加したDTMH(熱帯医学コース)というコースには二十七カ国から四十人のドクターが集まって来ており、コースが終了するとそれぞれの任地に戻っていき、半年近くもみんな苦勞してハードな勉強や試験をこなしてきた仲間達であり、国は違っても同じ夢を共有する仲間達が、今も世界中で頑張っていると考えると、何か自分もやらなくてはと心強く思えるものです。それに、最近JAMSのスタッフ達も、生き生きと自立して頑張っており、心強く思えるほどです。ちょっとやそつとの地震くらいでは壊れたりしないような感じですよ。

それでは、皆さんお元気で。

患者さんの悩みに胸が痛みます

ペシャワール・ミッション病院医師
札幌里塚病院医師
吉武英子

皆様お元気でしょうか。

こちらではタンポポが咲いていますが、私の故郷、北海道では雪まつりも終わり、春の気配を感じはじめていることでしょう。



中村医師に報告する吉武医師

こちらに来て四カ月がたちました。やはり四カ月のうちにはいろいろなことがあるものです。湾岸戦争以来、病院の人たちの忠告に従い軟禁状態を守っています。それ故病院の中だけにいるので社会ではどんな様子なのかわかりませんが、とりあえず私たちは何もなかったかのように一日一日をすごしています。また、先日は大地震がありました。当地ペシャワールでは特に大きな被害はなかったものの、田舎では大きな被害がありました。

こちらでは電話等の確実な連絡手段がないため、そのような地方から来ている入院患者さんの家族への心配は大きなものでした。このように患者さんは日本とは異なり自分の病気の他に、田舎に残した小さな子供の病気の他に、田舎に残した小さな子供のこと、家族の無事やお金のこと等を心配しなくてはなりません。遠い田舎から来

ている貧乏な患者さんが多いだけに家族はめったに会いにこれず、お金がとうとう尽きてしまったのか、妻や子の病気が悪くなったのだろうかとこちらの胸の痛くなるような悩みをかかえています。

彼らは一日五回お祈りをしてはいますが、貧しい生活の中で一切を神のわざと信じ日々祈りながら治療に専念している姿をみる時、私ももっとよい治療をしてあげたいと自分の微力にいらだたしさとともに責任を感じます。というのは思うように傷が治らないこともあり、こんなときはつらいし、ストレスを感じます。

こんなことや言葉のちがいが、習慣のちがい等があり、一日はけっこう疲れます。でもそんな問題があるからこそ、ここにいることの喜びや感動があるのではないかと藤田さんと話したりしています。まあこんな調子でポチポチとやっています。これからは中村先生がもどられたので、いろいろ教えてもらいながら少しはまともなパキスタンの医者になれるよう努力しようと思っています。それでは今日はこの辺で。皆様の御健康をお祈りしています。

1991年2月24日

指のない手に愛しさを感じます

ペシャワール・ミッション病院看護婦
福岡徳洲会病院看護婦

藤田千代子

ペシャワール会の皆様お元気でしょうか。ペシャワールは、時々ふく風もぬるくなり、花も一斉に咲き出しました。ひまわりも咲いています。

日差しも日ごとにじわじわと強くなりつつあり、夏もすぐそこに感じられます。

つい最近新年をむかえたと思っていました。が、もう三月に入り、月日の流れの早さに驚いています。

皆さんに大変心配していただいた大地震ですが、病院や私達の住んでいる家では特に被害はなく無事でした。ただ、夜中だったこともあり、とつてもおそろしい出来事でした。らい病棟の患者さんの村では、死者が出たり家がくずれたりで大変な被害を受けたようです。まだ足のうら傷も良くなくていなかったのに、急いで退院して帰って行った人もいました。

現在も新聞の一面を占めている湾岸戦争では、二月の初めより外国人は外出しないようにとの事で、約一ヶ月間病院の敷地内から外出はしませんでした。私達の家は病院内にあるので仕事はいつもと変わりなく

出来ましたし、敷地が広いので散歩などは出来ましたので外に出れなくてストレスがたまるといことはなかったように思います。たくさんの方がたいへん心配して無事を祈って下さったようです。おかげ様で本当に元気で無事に過ごしております。

少しらい病棟のこと（患者さんの手について）を話したいと思います。

患者さんの中に普通にまっすぐに伸びた五本の手指を持った人はほんの数人しかいません。手指がまっすぐない



（絵があんまり正確ではないのですが、十人十色で、まだまだいろいろ変形したり指がなかったり、ちぎれそうになったりしているのです。五本指があってもじやんけんのグーのようにぎっちり曲がった指、だんだん拘縮しつつある指。もちろん、この手で皆生活しているわけです。この指を少しでも真直ぐにしたい、また、これ以上拘縮するのを防ぎたいと思います。十分なエクササイズをやれないでいます。これは時間の問題とエクササイズの知識の問題が大きいです。中途半端に残っている一



手術室で準備する藤田さん

本（半本？）の指がその人にとって大切なものなのです。そして今、エクササイズが必要なことがわかっていながらそれが出来ないことを腹立たしく思います。

最近二つのことを感じています。

一つはどこかに時間とエクササイズの知識を持っている人がいないだろうか、とい

淡々とした中に

深い愛情

ベシャワール会事務局

西岡和子

雨のベシャワール

今日は三月八日。春のベシャワールは思いのほか雨が多く、二月二十一日に到着以來二、三日おきに降っています。普段は埃っぽい街も夜来の雨があがった午前中のほんの何時間かは透明な空気をとり戻し、遠

うこと。

二つめは指の五本そろっている手より、指がなかったり少なかったりする手の方に愛しさを感じるということ。

お元気でお過ごし下さい。

ピル ミレンゲ!!

くに美しい山並みを見せてくれます。そしてこの季節、文字通り日ごと、ひと雨ごとに春めいて、自然も人々の生活もどんどん活気づいてくるようです。

さて、この街で昨秋以来活躍中の吉武先生と藤田さんは季節の移ろいに関わりなく、いつも春の雨のような愛情を患者さんにふり注ぎ、「ドクター・エイコ、シスター・フジタ」と皆に慕われています。中村先生直伝のウルドゥ語も驚異的な速さで修得され、スタッフとも冗談を交わしながら楽しそうに働いておられます。もうお二人抜きらしい病棟は考えられない様子です。

私がこちらへ着いた湾岸戦争たけなわの頃は、ミッション・ホスピタルの敷地内のコミュニテイから外へは出ないようにとの病院側の慎重な指示を守っておられ、もう一ヶ月も買物にも出ていないとのことでした。

た。どんなにか不自由で、また不安でもあったことかと驚いたのですが、吉武先生も藤田さんも淡々としておられ、生活にも大きな変化はきたしていないという風でした。日常から彼女たちの時間と意識の如何に多くの部分が患者さん達とのことにのみ向けられているのか、あらためて知る思いがしました。

三週間前こちらへ着いた頃には、街で外国人の姿は全く見かけませんでした。停戦以来、JAMSの斜め前のアメリカン・クラブに金髪の人が入りする姿もちらほら見かけるようになりました。この三週間、土地の人々の姿だけを目にして来た私にとっても、ショートカットでパンツ姿の女性が一人で車で乗りつけ、テニス・ラケットを肩にさっそうと降りてくる光景は、妙に神経を刺激するものがあります。欧米の人をとり巻く状況は実際には決して急激に緊張をとり良いようなものではないらしいので、彼らが自身の情報不足に対してあまり高い対価を払われるようなことがなければ良いと思っただけですが……。日本人の安全については今のところ心配はないとのことでした。



募 集

JAMS発

「共に歩む」ボランティアを!!

JAMSでは日本からのボランティアを募集しております。ただし、JAMSは出来上がった団体ではなく、熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ボランティアを歓迎します。

短期長期を問わず受け入れます。送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、ボランティアたちは短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々の便宜を図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象：

1. 医療技術者（医師、看護婦(士)、検査技師、理学療法士など）。又は事務関係者で外国語（英語又は現地語）の堪能な者。

2. 以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、日常英会話ができる者。

② 6カ月以上の滞在者は、現地で1カ月、ペルシャ語またはパシュトゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をしたいいただきます。

③ 派遣団体などからのサポートのない場合、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費の一部を負担します。旅行傷害保険は自前です。ボランティアとしての報酬は期待できません。

④ 学生などの短期見学も拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。（繁忙期には断ることもあります）

⑤ 現地のビザや身分は、現地パキスタンの行政機関と協力して保証し、最大限の安全も図ります。

詳しくはペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

Japan-Afghan Medical Service



二人の日本人女性を横にしてニコニコ顔の
サンダル・ワークショップの職人さん(中央西岡さん)

気分の落ち着く町

一方、地元の人々の表情はと言えば、古くから様々な侵略者を迎え、今また大国のエゴのため多くの難民を抱え大きな歴史の流れに翻弄されることには慣れっこになっているのか、平和な経済大国日本の私たちよりもよほど悠々と自分の生きている時間を楽しんでいるようです。こちらの大多数の人々は生きてゆく為に必要な最低限度のものしか持っていませんが、それ故か、却って人間が何によって生きるのか確かに知っているように見えます。

ペシャワールの街は埃っぽくゴチャゴチャ

ヤとしてはいるのですが、通りの車を除いては、人工的なものや金属的なものも日本に比べて非常に少なく、私の眼には優しく映ります。何よりも良いと思うのは、建物と街ゆく人々の衣服とそれを着ている人の体格や物腰とが年月に磨きあげられた調和をそのまま保っているということです。外国人の私が借り着のシャルワル・カミーズとショールをぶきつちに体にまとわりつかせ、時にはズルズルと脱げかかったりもしながら歩いていると、本当に「おジャマしてすみませんね」という気持になってしまいます。それでも、ペシャワールは妙に気分の落ち着く街です。

ペシヤワールを訪ねて

昨年暮れから正月にかけて、梶原・舩井の二人の事務局員が現地ペシヤワールを訪ねました。二人のリユックの中には、現地スタッフへのおみやげとして、事務局恒例の年末餅つき大会でつかれたお餅もしっかり入って行きました。以下二人の報告をお伝えします。

私達の協力はこれから

ペシヤワール会事務局

梶原泰治

*現地にとけこむ女性スタッフ

一年ぶりに訪れたペシヤワールの街は、相変わらず賑やかである。

新聞は連日、ペルシヤ湾岸の緊張、カシミールでの紛争、ソ連の動きなど揺れ動く世界を伝えている。

藤田さんと吉武さんは元気になっているかな……。



JAMSでスタッフの話を聴く

ご二人は当地にとけこみつつあり表情は明るい。まずは一安心。

毎朝病院スタッフとの打合せで診療が始まる。藤田看護婦が着任後三カ月、吉武医師が二カ月、病棟でのウルドゥー語での診療には小さな辞書もまだ欠かせないが、二人の修得ぶりには驚いてしまう。教授は中村先生と患者さんとのこと。

老人の足の機能回復（エクササイズ）運動の場面、藤田さんが足をとって動かすよ

う指示し、吉武さんが反応を見る。指示や答えの言葉に少しでも不安な様子があるようだとすぐに周囲から助け船が出る。ウルドゥー語の外にペルシヤ語やパシュトゥー語が飛び交う。こんな楽しい病棟があるのだろうか。

ミッション病院がパキスタン北西部でのらい根絶計画のセンターとなっている今、ここでの課題は巡回診療であり、始まったばかりである。

日本からの援助により、病棟やサンダルワークショップが徐々に良くなりつつある。

*シャワリ医師との再会

ユニバシテイータウンに向う。今各国の援助団体は徐々に帰国していると聞く。この街の一角にあるJAMS（日本アフガン医療サービス）でシャワリ医師と再会できた。大きな手のお出迎えである。

こちらは二名の女性医師が加入するなど、態勢は整ってきている。今外来患者を中心とした診療を行っているが、女性医師の加入で特に女性患者のケアがきめ細かくできるようになっている。

緊要の課題として現在、マラリアの診療

研究に力を注いでいるという。

哲人の風のあるシヤワリ医師が今後のJAMSのこと、アフガン復興について静かに強く語ってくれる。

アフガニスタンからソ連の軍隊が引き上げて一年余、表面上の戦いは伝わってこないが、アフガンの人々、そしてパキスタン北西部一帯にきている多くの人々にとって、これからの長い復興への時期である。私達の協力はこれからがますます重要になるのではないだろうか。

見らんとわからん!

ベシヤワール会事務局

舛井誠一郎

*肌で感じた現地

ちよつとしたきっかけでこの会に片足つっこんだその瞬間、ズボットと首まではまりこんで九ヶ月、やっぱり見らんと解らんこともあるやろうということで行ってしました。

「おー、あるある。やっぱりあるばい」という何ともつかぬ感想ですが、そう思い

ました。福岡では週一回集まるのを大変楽しみにしとりまして、ベシヤワールという地、中村先生、この会の活動といったものに対して一つの「夢」としてとらえているようなところがあります。しかし現地にはミッシェン病院があり、うら傷を作った患者さん（にこにこしてますが）が実際にいて、吉武さん、藤田さんは毎日治療に当たり、またJAMSも文字や理想としてではなく本当に在りました。まあ私の出来の悪い頭の中で、夢と現実がごちゃまぜになつとるわけです。

*この人のためなら……

何といつても印象に残ったのはJAMSとシヤワリ先生でした。中村先生が繰り返して書かれましたし、頭の中では解っているつもりでしたが、JAMSというのはスタッフ全員がアフガン難民です。字にするとは6文字の重みです。みんな何事もないかのように仕事をしています。肉親、兄弟が戦争とそれに続く内戦で殺されたなどとおつさり言われたりすると、もう私には到底想像できないものがあり「ウーッ」とうなるばかりです。

めったに会いませませんが、「この人のためなら火の中の中」と思わせる人がいます。会ってしまいました、この旅行で。シヤワリ先生です。うまく書けませんが清水の次郎長か西郷隆盛といったところでしようか。戦争を心から恨み、自分に出来ることを出来る範囲内でやり続けなければならぬとおつしやっていたのが大変印象に残りました。

日本に帰って来ればまた相変わらずの日々が待っておるわけです。つらいものがありますが、これからも週一回、東に重いものあれば担ぎ、西に手の届かない人あれば行って手を伸ばす、やる気のある時はやり、ない時はしない、こういう精神で末長くこの会と付き会えたらと思っています。



子供達はどこでも人なつこい (左が舛井さん)

盆地を囲む大地の上に
小さなたき火が見え、白
く細い煙が垂直に昇って
いた。

すでに雪をかぶったヒ
ンドゥークシの峰々が、
日没直前の残照で金色に
光る。盆地の底は青灰色
の夕闇に埋まっている。
村で夕食を支度する煙が
何条も中空に伸び、横に
拡がって薄い薄い膜をつ
くり、大地から昇る煙が
そこに溶けこんでいた。
たき火をはさんで二人
の老人が見える。私と連
れのアフガン人は、じゃ
が芋を掘った後の畝をまたいで近づいた。
足元では薄い氷が音を立て、村外れのポプ
ラ林でかさざさが鳴いた。

詩を朗詠し合う農夫

老人達は、この谷に住む蒙古系ハザラの
農夫だった。

私達を見た二人は、微笑してサラームと
挨拶をよこしたが、頬は涙でぬれていた。
静かで小さなたき火の煙が涙を誘ったとも
思えず、私達は何か事情のある所へ踏み込



文・画 甲斐大策

言葉

アフガニスタンの旅から

んでしまったような気持ち
でいた。

「火にあたりなさい。茶
もある。」

一人の農夫が手元の棒を
たき火の中へ入れ、把手に
ひっかけて煤けた小さなや
かんを引き出す。

私の連れが急に表情を柔
らげた。

「あんた達、詩をやつて
たんだね。」

二人の農夫は席をあけ、
頬の涙を拭う。

彼らは自作の詩を披露し
合ってたわけではなく、口
伝えに覚えたペルシア語の

詩を朗詠し合っていたのだった。

二人とも文字の読み書きは出来ないという。
峰の光が消え、谷全体が一気に暮れる中
を私達は連れだつて村まで下った。

二十年ほど前の晩秋アフガニスタン中
部、バミーヤーンでのことだった。

サング・バアカ

当時の私は言葉の習得に必死だった。連
日のように言葉にまつわる感動や疑問と出
合っていた。

ある日私は、南部カンダハル近くの沙漠
に入り、有史前の遺跡を訪れるべく、アフ
ガン人の友人とひたすら歩いてきた。

乾ききつた大地の上に蛙がいた。蛙とい
えば私達は水を連想する。その蛙は、トゲ
草をよけながら果てしない荒地地をはねて
いった。ひとはねするたびに小さな土埃が
立つのだった。

私は旅の連れに、あいつは何という、と
訊ねた。

「ああ、あれはバアカというよ。」
なる程、蛙はペルシア語でバアカという
のか。ならば殿様蛙とか青蛙とかヒキ蛙な
どはいるのかいないのか。

「他にバアカはいるかね？」
「色々いる。そうだな、サング・バアカ
というのがある。」

私は、サングが石を意味することは知っ
ていた。ならばサング・バアカは石蛙となる。
げげんな顔の私に、連れは必死で説明を
こころみる。

「このバアカは家を持っている。」
私は、カタツムリのような蛙を想像した。
この連れは、ヒンドゥークシ山中に神秘的
な世界を保っているヌリスタンの出身であ
る。今日まで一個体しか採集されていない
蝶の珍種があるような土地である。もしか
したらサング・バアカ(石蛙)は、世界の

蛙学界を驚天させる未発見の新種かも知れない。私は胸がときめいた。

スケッチ・ブックに、私も手伝って絵を描いてもらった。それは亀だった。

蛙という範疇で他種を問う私に、彼は音に従って別種を紹介してくれたのだった。

こんなすれ違いは無数に起こった。

「モルグ（鶏）にはどんな種類がある？」

私はチャボや軍鶏を想像する。

「フィル（象）・モルグ。」

とてつもなく大きな鶏がいるのか。それは七面鳥だった。

「他に？」

「ええと、モルグ・アビイ（水、または青色）がいるな。」

水鶏、泳ぐ鶏がいるのか、それとも青い鶏がいるのか。私はもう失敗を繰り返さなかった。モルグ・アビイは鴨である。

これは私の愚かさを示す一例にすぎないが、一方で、私は日本語が、漢字の介在によって、他のどんな言語よりも、常々私達に翻訳作業を強いている言葉ではないか、と思いはじめていた。

遺体を前に人々はけんかした、と耳から音だけで聞いた時、それが「喧嘩」か「献花」か。パキスタン軍カシムミールにシンコウ、それを「侵攻」ととるか「進攻」と理解するかによって一国の行為の正当性と

犯罪性が分れかねない。

言葉そのものが持つ力

私達の言葉は、字が読める読めないでその理解や認識に大きな格差がでる。読めたとしても漢字の翻訳が正確でないという意味がとれない。

そんなことを考えている私に、アフガニスタンの人々は、言葉そのものが持つ力を示し続けた。

東部のジャラーラーバードの旧王の離宮には、毎年春になると全国の有名無名の詩人達が集まるのだった。詩人達は茶を飲みながら詩を披露し合い、感じれば涙を流し、抱擁を交わし、別れるのだった。そして、その詩人が読み書きできるとは限らなかつた。読み書きの能力と彼等の詩作や詩の理解力とは無関係なのだった。

詩は、その高い抽象性のゆえに言葉の頂点にある。アフガニスタンの人々はそれを知っている。

ラジオにも女性解放の集会にも、それに反対する男達のデモにも、詩の朗詠は大き

なウエイトを占めていた。

詩の一行も暗誦していない者は、まるで人間ではないかのようだった。

今も時々送ってくるムジャヒディン（イスラム戦士）の機関誌には、死んでいった若者の詩、それをいたむ詩、戦いをたたえる詩、戦いを悲しむ詩、詩、戦いを溢れている。

アフガニスタンの識字率は一割にも満たないといわれている。私は識字率という言葉に抵抗を感じ始めて二十年になる。この言葉は、字を識らない者は知的に劣る、と思わせてしま



観がみえる。

字を識ることと言葉を識ることはまるで別、と私は彼等から教えられ続けている。常に表意文字が介在する私たちの言葉は力を失い、そのものが魂に迫る彼の地では未だ言葉が力を保っている。

（本文は、1990年1月、「西日本新聞」掲載原稿に、加筆したものです。）

会員からのお便り

*ベシヤワール会報・臨時号いただきました。新聞で九〇年秋以降の中村哲、甲斐大策、辻睦雄さんがたのアピール、それに地震後の関係者の方々の消息など欠かさず読んでおります。具体的な体験の中から時宜を得た啓蒙で、ありがとうございます。

今日、いただきました中村哲さんのアピールは悲痛です。日本政府の戦争協力態度で私も紛れもない加害者になります。戦中派の最後の鎖にぶら下がっているもののあのやり切れなさ、無力感に悲観的になっておりますが、ベシヤワール会員であることは一つの慰めであります。祈りは行動と共にあり、です。会報をいただきましたまして、黙っているより共感をお伝えしたい、そして、少しの元気をいただきましたことも感謝しなくてはと思いました。困難の中で「我々のベシヤワール」が守られますように切に祈ります。

粕屋郡 Y・N 女

*新年明けましておめでとうございます。今年も苦しい環境で生きている人のために、一生懸命ボランティア活動されることを希望します。茨城県 N・Y 男
*貴会は失望しそうな医療人の救いかもしれませぬ。
千葉市 I・M 女

*世界が大きく変動していますがベシヤワールや、あちらの皆さんへ影響はありますか? 「平和な世界になりますように」が切実な祈りになってしまいました。たね。早く終わってほしいですね。

久留米市 I・M 女

*ベシヤワール会報を何時も読ませて戴いてます。風土、環境、習慣が違う国で、しかも豊かな国から出国されてのご奉仕、只々頭がさがります。体を大切になさって頑張ってください。

福岡市 H・F 女

パキスタン地震に関連して

去る二月一日、ベシヤワール北部周辺地域及びアフガニスタン東部でマグニチュード6・8という大規模の地震が発生したことは、まだ会員の皆様の記憶にも新しいことと思います。

「ベシヤワール会報・臨時号」でお知らせし、また西日本新聞紙上にも掲載されましたように、幸い現地で活動中の日本人スタッフ(石松・吉武両医師、藤田看護婦、ちなみに中村医師は一時帰国中でした)や現地スタッフは全員無事とのことで、事務局一同ほっと胸をなでおろしたところでした。

地震のニュース直後に国際電話をかけた折、電話口に出られた石松先生が「夜中に目が覚めた程度だった」と平然としておられたので、さぞやベシヤワール市内は平穏だったのだらうと思っていましたが、最近の藤田さんからの手紙では、寝室の天井のファンがユラユラと大きく揺れて大変に恐ろしかったとのこと。また、偶然現地に行っていた知人からもホテルの宿泊客は皆裸足で表に飛び出し、真っ青になっていたと聞くにつけ、やはりかなりの地震だったのだ、と改めて思い知らされました。

私達の関係者が無事だったことはもちろん嬉しいことですが、山間部で千人を越す死者(おそらくもっと増えていることでしょう)、家をなくし、道路も通信網も分断されて、大変な生活を余儀なくされている被災者の方達のことを想うと、やはり胸が痛みます。

つきましては、今回「日本・パキスタン協会」(会長・上田俊之氏)より、被災地への見舞金送金のお話がありましたので、会からと、事務局有志より寸志を送らせて頂きました。ここに誌面をかりて、ご報告に代えさせていただきます。一日も早い被災地の復興を心よりお祈り申し上げます。(事務局一同)

*会報ありがとうございました。隅から隅まで拝読いたしました。事務局の方々のかわりも知ることができました。こういう形の参加しかできませんが、この会の一員であることに満足しております。

粕屋郡 Y・N 女

*湾岸戦争で中村先生がこんなに悲しく怒っているのを感じて私もとても辛く思った。

松本市 T・H 男

*ベシヤワールの地震その後大変でしょうね。中村先生、他の皆様のご無事をお祈り申し上げます。

久留米市 T・S 女

*ベシヤワール会報によってご活躍の様子を知り、いつも感銘を受けています。

電話 ○九三二五八二一五六一七

中村先生はじめスタッフの皆様のご健康をお祈りしています。
大野城市 K・K 女
*十一月十一日北九州におけるカトリックフェスティバルのベシヤワール会パネルの前で声をかけてくださった熊本の会員の方をお願いします。
ご住所お名前を私までお知らせください。これから私どもの小さな歩みを交換させていただけたら嬉しいと考えています。
〔アジアを考える会・北九州〕
北九州市小倉北区木町一丁目
四一十一一三〇三
松室淑子

「朝日新聞」(一九九一年二月二十二日)

論壇

明した。

私たち福岡市に本部を置く「ペシャワール会」は、本日「JAMS」は、過去八年

間に米国を聖地に引き入れ、イスラム教徒同士を戦わせたサウジアラビアははるかに悪い」だった。

理解な欧米の非政府組織との摩擦などの中で、混乱のまま放置されている。ほとんどのイスラム住民

では激しい反米英テモが荒れ、一週間の外出禁止令が全国にしかれた。JAMSは、イスラム住

の議論よりも、米国の一方的な価値観と情報のみで踊らされる現実こそ、恐怖すべきではなかったか。

初め、それは高校野球の中継のようだった。テレビは米軍の大戦果を流し続け、評論家が他人事のように戦争を語った。テレビゲームのようでもあった。バムグッドを走る無数の閃光(せんこう)は、その下で多くの市民が飛び散るのを感知しないようだった。

間、アフガニスタン難民があふれるパキスタンのペシヤウルで診療活動をしてきた。民間の良心に支えられた小さな団体だが、イスラム住民と苦楽を共にする者

西欧列強の利害で線引きされたに過ぎない国境を越えたイスラムの一体感を、日本人は余りに過小評価している。西欧的な国家観を共有できるといふことが、そもそも誤解だ。多国籍

にすれば、日本で自明とされる「国際秩序」や「国際正義」も、欧米勢力の押し付けた虚構としか思えない。それは今回の事態と、放擲されたままのパレスチナ問題に関する国連決

た日本の国旗をわざわざ掲げてきた。これを取り外さざるを得なくなる事態も懸念している。

国際秩序という時、そこには欧米と文明観、価値観を共有しているわけではないアジアの同胞への地についた理解が欠かさない。我々のアジア観の再検討が迫られている。

イスラム住民に無理解な日本



中村 哲

何よりも、一つの破局の開始が日本を席巻した事実

として、現地の山なき声を届けねばと願う。一般に、イスラム教徒の

軍に一部アラブ諸国が参加しているが、これも民衆の意思の代弁ではない。もう一つ、奇異なのは日

議との間で明白な、中東問題に対する「二重基準」を挙げるまでもない。我々は、日本の動きがJAMSの活動に与える影響

念している。湾岸支援策の決定に当たっては、それなりの判断があっただろう。だが、我々は歴史的転換期とか、国際的役割とか言う割に、余りに自分自身を省みる態度に問われねばならない。

半世紀前、ほかならぬ我々自身が、伝統社会と西欧近代化のきしみの間で、対米戦争という形で苦悩した。戦争の総括は終わってはいない。ヒロシマ・ナガサキと数百万の「英霊」たちの犠牲の意味は、今こそ問われねばならない。

か。多国籍軍への九十億追加援助表明で、日本は米

悪い。「アングレズ」(英国)は、敵の代名詞だ。現地庶民の平均的な反

だ。パシヤウル周辺の北西辺境州だけで二百七十万人ものアフガン難民は、国連

機構のさまざまな情勢判断や婦選計画、現地の実情に無

岸戦争突入で、パキスタン

か。目先の「国際的貢献」

戦したのである。数億のイスラム住民に敵対する戦争

武力を向けたフセインは確かに悪い。だが、事もあろ

るに米国を聖地に引き入れ、イスラム教徒同士を戦わせたサウジアラビアははるかに悪い」だった。

理解な欧米の非政府組織との摩擦などの中で、混乱のまま放置されている。ほとんどのイスラム住民

では激しい反米英テモが荒れ、一週間の外出禁止令が全国にしかれた。JAMSは、イスラム住

の議論よりも、米国の一方的な価値観と情報のみで踊らされる現実こそ、恐怖すべきではなかったか。

遂行を、進んで「断罪」表

か。目先の「国際的貢献」

岸戦争突入で、パキスタン

か。目先の「国際的貢献」

岸戦争突入で、パキスタン

か。目先の「国際的貢献」

遂行を、進んで「断罪」表

か。目先の「国際的貢献」

岸戦争突入で、パキスタン

か。目先の「国際的貢献」

岸戦争突入で、パキスタン

か。目先の「国際的貢献」

JAMS顧問(内科医) パキスタン在住

●事務局だより

*90年度・年末年始募金の呼びかけに対して三八一万八三九円が寄せられました。ありがとうございます。募金の内訳は次の通りです。

- 個人 三五九人 二、九八七、一〇二円
- 団体 二三件 八三一、二九七円
- 合計 三八二件 三、八一八、三九九円

*一月末に、JAMSでの診療費ならびに医療スタッフのトレーニング用中古顕微鏡の寄贈を、マスコミを通じて呼びかけた処、たくさんの申し出がありました。九州各地だけでなく東北・山口など全国から予想以上の反響で、顕微鏡だけでなく、寄附や医療協力の申し出もありました。ただ顕微鏡が全て中古だったためそのままでは使用不能のものが多かったのですが、幸い福岡市内の顕微鏡の販売会社の方々のご協力で、部品を相互に取り換えたりして、都合七台が使用可能な型で甦りました。ご寄贈いただいた方、ご協力いただいた方々に感謝申し上げますと共に、引き続き顕微鏡のご寄贈のお願いをしたいと思います。なお機種としては双眼で千倍以上のものです。

*今号の会報は、現地のボランティア・ワーカーの手紙を中心に構成いたしました。特に湾岸戦争の影響で、吉武・藤田のお二人は病院の敷地外に全く出られなかったそうで、元氣な中にもいろいろとストレスがたまったことと思います。本当にごくろうさまです。また中村先生には湾岸戦争後の現地の様子を報告していただきました。イスラム世界に根づいて活動を続ける数少ない日本人として、新聞各紙や『エコノミスト』等にも原稿を書いていただきました。湾岸戦争中には、ほとんど西側(主にアメリカ)のみの情報が流され、停戦後はクルド族の難民問題以外、イスラム深部の声が何も届いてこない中で、中村先生の報告は貴重なイスラム世界のメッセージだと思えます。

*今回の湾岸戦争は、直接当事国だけでなく、九〇億ドルで参戦しかつ徹底的に無力であった私たちにも、大きく重い課題をつきつけたまま宙づりになっています。逃げずに踏んばらねばと思います。(お願い) 当分の間、郵便振替と手紙は従来通り福岡YMCA内ペシャワール会宛でお願いします。(〒810 福岡市中央区天神一丁目10-24 福岡三和ビル4F 郵便振替 福岡9-16559 ☎七二七四〇〇)

ペシャワールにて
— 癩らいそしてアフガン難民

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ
中村 哲著 四六判上製二二〇頁 一、五四五円

ペシャワールについて語ることは、人間と世界について総てを語ることであり、と言っても誇張ではない。貧困、富の格差、政治の不安定、宗教対立、麻薬、戦争、近代化による伝統社会の破壊、およびその凡ゆる発展途上国の抱える悩みがここに集中しているからである。悩みばかりではない。我々が忘れ去った人情と、むきだしの人間と神に触れることができる。(著者「あとがき」より)

せきふうしゃ
石風社

福岡市中央区大名1-2-15
電話092(714)4838 振替福岡4-25227

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のバキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 役員の変更は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE
(〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇-二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二-三七二) 内におく。